



私が子供だった頃から、1980年頃まで、この曲は、テレビやラジオ、商店街などから、よく流れて来た。言うまでも無い、名曲であるが、とりわけ中盤の、裏声によるサビの部分が、心に突き刺さる。全体に、抑えた哀愁と、泣き節、快く切なく流れる、歯切れの良いリズムが、印象的だ。

飯田久彦の、原語と日本語のチャンポン版（かなりヒットした。テレビでも、飯田のクネクネと歌う姿を、よく見かけた）も、悪くはなかったが、やはり、オリジナルのままのテイストが、より良かった。

（収集プロフィール）

デル・シャノン (Del Shannon, 1934年12月30日-1990年2月8日) は、アメリカ・ミシガン州出身のシンガーソングライター。本名はCharles Weedon Westover。1961年のデビューシングル「悲しき街角 (Runaway)」がビルボード1位を獲得するヒット曲となった。1990年2月8日、自宅において猟銃自殺。ほかに「太陽を探せ」「花咲く街角」などの、ヒット曲がある。

人物

14歳の時にギターを手にしたのきっかけにミュージシャンになる事を決意。高校時代にはバンドも結成し、更にはナイトクラブにも出入りし活動を開始。一時期は軍隊にも入隊するが、除隊後と地元ミシガンでオルガニストのマックス・クルックと共にバンドを結成し、レコードを出すものの鳴かず飛ばずだったという。しかし、1961年に「悲しき街角」が大ヒットをし、ここで運命が大きく変わる。その後ヒットを何曲か飛ばし、1963年にイギリスに上陸した際にはビートルズとも面識があったという。しかし、1960年代の半ば頃から徐々に精神的バランスを崩すようになり、アルコールにも手を出してしまう。ヒットも「街角のストレンジャー」を最後に長い低迷時代を向える。1982年にフィル・フィリップスの1959年のヒット曲「シー・オブ・ラブ」をカバーをし、全米トップチャートで40位にランクインし、プチ復活をする。1985年には「ミュージックフェア」にも出演を果たし、テレビ朝日のオールディーズ番組にも出演。しかしその日は番組開始10分過ぎ位に入った御巣鷹山の日航機事故特別臨時ニュースのため、デルのシーンがカットになったという。

主な曲

悲しき街角 RUNAWAY

花咲く街角 HATS OFF TO LARRY

さらば街角 SO LONG BABY

街角のプレイガール LITTLE TOWN FLIRT

街角のストレンジャー STRANGER IN TOWN

太陽を探せ KEEP SEARCHIN'

ふた粒の涙 Two kind of teardrops

スイスの娘 The Swiss Maid

鏡の中のジニー Ginny In The Mirror

*日本では特に彼のヒット曲には「悲しき街角」を筆頭に邦題に「街角」が付くのが多く、彼のキャッチフレーズも「街角男」だったという。

悲しき街角

花咲く街角

恋する街角 (Give Her Lots Of Lovin`)

さらば街角 (So Long Baby)

街角のプレイガール

調べてみるまで、私はこの曲の背景に、こんなに複雑な経緯があり、こんなにも多くのアーティストが関わっていた、ことをまったく知らなかった。私が子供のころ、当時の白黒テレビで、この曲は、ポップス系のたくさんの歌手がカバーしていた。ラジオや商店街の流す音楽にも、この曲はよく使われ、10年近くの間、年に50回以上は聴いていた。テレビでは、はじめに必ず、トーケンズの詞・曲であることが、クレジットされていた。坂本九、ダニー飯田とパラダイスキング、尾藤イサオ、などが歌ったのを、いまでも覚えている。すこし後になると、キングトーンズ(グッドナイト・ベイビーの)などが、よく歌っていた。

いい曲だが、かなり変わった雰囲気曲、とっていいだろう。裏声の部分が多く、しかもその声が、かなり気味が悪い。原曲が、アフリカの歌とわかって、納得した。

「The Lion Sleeps Tonight」(ライオンは寝ている) 1961

(We-de-de-de, de-de-de-de-de de, we-um-um-a-way)

(We-de-de-de, de-de-de-de-de de, we-um-um-a-way)

(A-weema-weh, a-weema-weh, a-weema-weh, a-weema-weh)

(A-weema-weh, a-weema-weh, a-weema-weh, a-weema-weh)

In the jungle, the mighty jungle

The lion sleeps tonight

In the jungle the quiet jungle (略)

(収集プロフィール)

The Tokens (トーケンズ、1955~?) 1955年ニューヨーク・ブロンクスで結成されたボーカルグループ。結成時のメンバーはニール・セダカ (Neil Sedaka)、ハンク・メドレス (Hank Medress)、エディ・ラブキン (Eddie Rabkin)、シンシア・ゾリチン (Cynthia Zolitin)。ニール・セダカは、デビュー曲のみリードボーカルを務めソロシンガー、ソングライターとして大成功を収めた。その後数回のメンバー変遷を経ます。

1956年 (Eddie Rabkin) が脱退、ジェイ・シーゲル (Jay Siegel) が加入。

1957年 (Cynthia Zolitin)、(Neil Sedaka) が脱退、フィル・マーゴ (Phil Margo)、ミッチ・マーゴ (Mitch Margo) 兄弟が加入。

1961年に世界的なヒットとなったこの「Lion Sleeps Tonight」(全米1位、全英11位)の他には、同年の「Tonight I Fell In Love」がアメリカで15位にランクインした以外、これと云ったヒット曲はありません。コーラスグループとしてよりは、他のアーティストのプロデューサーとしての活躍の方が有名です。

*「ライオンは寝ている (The Lion Sleeps Tonight)」は、元々は南アフリカのズールー族に古くから歌い継がれてきた民謡「Mbube (ズールー語で"ライオン"の意味)」を元にした歌で、1950年代のフォーク・グループ「The Weavers (ウィーバーズ)」のピート・シ

ーガー（Pete Seeger）という歌手が、「Wimoweh（ウィモウエ）」のタイトルで歌っていました。それを1961年にトーケンズがカバーしたもの。はじめは出来栄に満足せず、より本物を求めるプロの姿勢として、曲のリリースに反対していたともいいます。とあるラジオ局が約1ヶ月間繰り返しオンエアし、瞬く間にチャートをかけのぼって、それまで1位だったマーバレッツ（The Marvelettes）の「Please Mr. Postman（プリーズ・ミスター・ポストマン）」に替わり、堂々3週の間1位を守りました。

又、Karl Denver Trio（カール・デンバー・トリオ）、The Nylons（ナイロンズ）、Robert John（ロバート・ジョン）など、他のアーティストにもカバーされました。1度聴いたら忘れられないファルセットとコーラス。アフリカン・フォークの名曲です。

*「Mbube」（ズールー語でライオンの意味）は、1939年にソロモン・リンダによって書かれ、彼のグループ Evening Birds によって演奏された。「Mbube」は南アフリカで1940年代に10万枚売れるヒットとなった。この曲の名前は、後にアフリカのア・カペラの音楽スタイル「ムブーブ」（その後さらにイシカタミアへ進化した）の元となった。

アラン・ロマックスが、フォーク・ミュージック・グループのウィーヴァーズのピート・シーガーにこの曲を紹介した。1年以上彼ら（ウィーヴァーズ）がこの曲をコンサートで演奏した後、1951年11月、原曲のコーラス「uyimbube」（ズールー語で「あなたはライオン」の意味）を聞き違えて曲名を「Wimoweh」としたバージョンをレコーディングした。このバージョンは、全米チャートでトップ20を記録し、キングストン・トリオなどの有名グループにもカバーされた。ピート・シーガーは、この曲の意味について、ズールー王国の最後の王シャカをライオンにみだててヨーロッパがアフリカを植民地政策を進めたときに隠れた民話をあらわしていると述べている。別の説では、この歌はソロモン・リンダが若い頃に文字通りライオンの子供を殺した話が元になっていると Veit Erlmann が述べている。

ジョージ・デビッド・ワイス、ルイージ・クレアトーレ、ヒューゴ・ペレッティが新しい歌詞を書き、トーケンズが1961年に発表したバージョンは、全米シングルチャートで1位を記録した。また、イギリスではカール・デンバーのカバーは、高順位を記録した。この曲は人気があり、いくつものカバー・バージョンがある。

日本では1982年に佐藤ありすが新たに日本語の歌詞を書き、朝倉紀幸&GANG（朝倉紀行）が「ライオンは起きている」の曲名でカバーしたバージョンが、テレビドラマ『刑事ヨロシク』主題歌に起用された。

いまでも、多くのファンを持つ、世界的大歌手であり、文句ないスーパースター。私は、熱狂的なファンではないが、名曲のなかのいくつかは、いまでも新鮮に素晴らしい。下記の曲は、10年ほど前までは、日本人歌手によるカバー版が、テレビや喫茶店から、よく流れてきた。また、お笑い芸人によるコントのなかでも、よく使われていた。最近はその頻度が、かなり減っていると思うが。これは、年月によるものか、音楽の多様化によるものか。あと20年くらい経過すれば、分かるかも知れない。

Hound Dog (J.Leiber/M.Stoller J.Leiber/M.Stoller)

You aint nothin' but a hound dog cryin' all the time----

(収集プロフィール)

エルヴィス・アーロン・プレスリー (Elvis Aron Presley, 1935年1月8日 - 1977年8月16日) は、アメリカのロックンロールミュージシャン。ミドルネームは墓石には Aaron と綴られているが、サイン、公文書共に Aron である。キング・オブ・ロックンロールまたはキングと称され、ギネス・ワールド・レコーズでは「史上最も成功したソロ・アーティスト」として認定されている。1977年8月16日、心臓発作によりお、急逝。42歳だった。

「ローリング・ストーンの選ぶ歴史上最も偉大な100人のシンガー」において第3位。

*略歴I

黒人のリズム・アンド・ブルースと白人のカントリー&ウェスタンを融合することによって、今までにない新しい音〈ロック〉を誕生させ、広めた人物として知られる。初期はアメリカ、そして世界中の若者にロックンロールによって人気を博し、後期になるとラスベガスの舞台上でカントリーやゴスペル、バラードなどを歌い、万人に愛される人物となった。

エルヴィスは最初、「The Hillbilly Cat (田舎者の猫)」という名前で歌手活動を始め、その後すぐに歌いながらヒップを揺らすその歌唱スタイルから「Elvis the Pelvis (骨盤のエルヴィス)」の愛称で呼ばれるが、アメリカのバラエティー番組『エド・サリヴァン・ショー』の3度目の出演の際には、保守的な視聴者の抗議を配慮した番組関係者が意図的にエルヴィスの上半身だけを放送したというエピソードが伝えられている。その際にサリヴァンが「このエルヴィス・プレスリーはすばらしい青年です」と紹介したことからサリヴァンにも罵声が飛んだ。しかしこのおかげでエルヴィスへの批判は少なくなった。また、フロリダの演奏では下半身を動かすなとPTAやYMCAに言われ、小指を動かして歌った。この時には警官がショーを撮影し、下半身を動かすと逮捕されることになっていた。ステージでの華やかさに反して緊張しやすい性格で、レコード会社の門を叩けずに、入り口付近でウロウロ、ソワソワしていたこともあったようだ。「初舞台の時には死ぬほど緊張した。観客の声が怖かったんだ。」との言葉も残っている。

エルヴィスは友達だと思った人間には尽くすタイプだった。反対に「エルヴィスのお金や贈り物を求めて近付いてくる人間には、その姿勢に気付き距離を置いていたようである」とバンド・メンバーは回想している。

エルヴィスの記録は多数あり、例えば、最も成功したソロアーティスト、最多ヒットシングル記

録（151回）、1日で最もレコードを売り上げたアーティスト(死の翌日)、等がギネスによって認定されている。

生い立ち

エルヴィスはミシシッピ州テュペロの小さな家で、ヴァーノン・エルヴィス・プレスリーおよびグラディス・ラヴ・スミス・プレスリー夫妻の間に1935年1月8日に生まれた。彼はチューペロで幼年期を過ごし、13の時に一家はテネシー州メンフィスに転居した。彼には双子の兄弟ジェシー・ガロン・プレスリーがいたが、誕生時に死亡している。一家は1949年にロウダーデール・コート公営住宅に転居する。エルヴィスは11歳からギターを始め、ロウダーデール・コートの地下洗濯部屋で練習をした。彼はそこに住むミュージシャン達と演奏を行った。エルヴィスは高校卒業後に精密金型会社で働き、次にクラウン・エレクトリック社のトラック運転手となる。スコットランド人作家アラン・モリソンはエルヴィスがスコットランド系であったと主張する。彼はその著書でエルヴィスの先祖が1700年代にアバディーンシャーのロンメイで暮らしていたことを発見したとする。また、記録によるとアンドリュー・プレスリーが1713年にロンメイでエルスペース・レグと結婚したとしている。彼らの息子アンドリューが1745年にイギリスの植民地に移住したとのことである。また、ケビン・コスナーは自著本で、プレスリーがアイルランド人の血を引いていると主張している。同時に、プレスリーはドイツユダヤ人の血を引いており、さらに4代前の祖母は、純血のチェロキー族インディアンである。

1950年代のアメリカでは音楽も人種隔離的な扱いを受けている部分が多く残っており、当時のロックンロールのヒットソングも黒人の曲を白人がカバーし、そのカバー版が白人向けの商品として宣伝され、チャートに掲載され、またラジオなどで流れる傾向にあった。たとえ同じ歌を同じ編曲で歌ったとしても、黒人が歌えばリズム・アンド・ブルースに、白人が歌えばカントリー・アンド・ウェスタンに分類されることが常識だった。エルヴィスは、このような状況にあって黒人のように歌うことができる白人歌手として発掘された。

1970年代、エルヴィスがツアーをはじめた時、ツアー先の白人プロモーターから「黒人娘（「ザ・スウィート・インスピレーションズ」のことを言った。実際にはもっとひどい差別的な言い方をされた）は連れてこないでくれ」と連絡を受けたことが度々あった。エルヴィスは「彼女たちを来させないなら僕も行かない」と言い張り、向こうが謝罪し、多額のお金を積んだが、絶対に行かなかった。

サン・レコード

1953年の夏にエルヴィスはメンフィスのサン・スタジオで最初の両面デモ・アセテート盤を録音するため4ドルを支払った。収録曲は当時のポピュラーなバラード“My Happiness”と“That’s When Your Heartaches Begin”であった。サン・レコードの創業者サム・フィリップスとアシスタントのマリオン・ケイサーはその録音を聞きエルヴィスの才能を感じ、1954年6月に行方不明の歌手の代理としてエルヴィスを呼んだ。セッションは実り多いものであったかは分からなかったが、サムは地元のミュージシャン、スコッティ・ムーア、ビル・ブラックと共にエルヴィスを売り出すこととした。

1954年7月5日のリハーサル休憩中にエルヴィスは“That’s All Right, Mama”をいじくり始め、サム

はエルヴィスが適所を得たかもしれないと考えて録音ボタンを押した。即興での演奏でドラムスが不在であったため、ベースをかき鳴らしての演奏となった。B面に“Blue Moon of Kentucky”が収録されたシングルは、WHBQラジオが放送した二日後に、メンフィスでのローカル・ヒットとなった。また、公演旅行は彼の評判をテネシー中に広げることとなった。ラジオを聴いた人たちは黒人歌手だと勘違いしていた。

RCA

エルヴィスは1955年11月21日にRCAレコードと契約した。1956年1月28日に「CBS-TVトミー・ドーシー・ステージ・ショウ」にてTVに初出演し、黒人のR&Bを歌う。そこで彼は白人らしからぬパフォーマンスを披露したが、これに対してPTAや宗教団体から激しい非難を浴びせられた。しかし、その激しい非難にもかかわらず、それを見た若者たちは、エルヴィスのファンになっていった。

*1956年1月27日に第6弾シングル“Heartbreak Hotel / I Was the One”がリリースされた。これは1956年4月にチャートの1位に達した。Heartbreak Hotel はその後数多く登場したミュージシャンに多大な影響を与えた。

レコーディング場所について1950年代はニューヨークにあるRCAスタジオを利用したことがあったが、エルヴィスのキャリアにおいて、主演映画の挿入歌以外のレコーディング場所で最も利用されたのはテネシー州ナッシュビルにあるRCAスタジオBである。しかし、1972年以降はハリウッドにあるRCAスタジオや地元メンフィスのスタジオを利用した。更に1976年になると、RCAスタッフがエルヴィスの自宅（グレイスランド、ジャングルルーム）に録音機材を持ち込み、レコーディングを行った。

後年レコーディング自体に関心を示さなくなったのは、RCAのミキシングがエルヴィスの意向にそぐわなかったことや体調不良等の様々な理由があると思われる。しかし、エルヴィスは最後まで一発撮りと呼ばれる1テイク完成型のレコーディング・スタイルにこだわった（いくつかのテイクをつなぎ合わせて一つの曲として発表する形式や曲の別録りといった選択肢もあったが、エルヴィスはそれを嫌い、現在まで発表された曲数が700以上ある中で、そのような形式で発表した曲は少ない）。そのため、エルヴィスの死去後現在まで様々な未発表テイクが発掘されており、その中には発表されたテイクと違った趣向のものもある。後年、レコーディングに関心がなくなった頃は、体調不良を訴え、「歌のレコーディングは後で必ずするからミュージックだけ録音しておいてくれ」と言うこともあったが、ほとんどの場合、それは実現しなかった。

ヒット曲

ナンバー1ヒットは全18曲、合計80週間である。曲数はビートルズに次ぐ歴代2位である。週間数に関しては歴代1位である。ちなみに2位はマライア・キャリーの79週。（ビルボードに準拠）ロックン・ロール、リズム&ブルース、ゴスペル・ミュージックの3部門のいずれも殿堂入りした初のアーティストとなった。また、今のところ3度グラミー賞を受賞しているが、3度ともロック部門ではなくゴスペル部門においての受賞であり、エルヴィスは終生この事を誇りにした。

全米ナンバー1獲得曲

ハートブレイク・ホテル (Heartbreak Hotel) 1956年 8週間連続1位

アイ・ウォント・ユー、アイ・ニード・ユー、アイ・ラヴ・ユー (I Want You,I Need You,I Love You) 1956年 1週間1位
ハウンド・ドッグ (Hound Dog) 1956年 11週間連続1位
冷たくしないで (Don't Be Cruel) 1956年 11週間連続1位
ラヴ・ミー・テンダー (Love Me Tender) 1956年 5週間連続1位
トゥー・マッチ (Too Much) 1957年 3週間連続1位
恋にしびれて (All Shook Up) 1957年 9週間連続1位
テディ・ベア (Teddy Bear) 1957年 7週間連続1位。エルヴィスは「なぜこんな曲が7週No.1になったのか」と疑問に思ったという
監獄ロック (Jailhouse Rock) 1957年 8週間連続1位

私が子供の頃から、すごく流行っていた歌で、10年くらいの長期に渡って、ポールのオリジナル版が、ラジオから流れ、商店街に流れ、テレビでは、山下敬二郎や平尾昌章、飯田久彦などが、日本語詞版、ときにオリジナル版を歌っていた。私のこの曲に対する印象は、起伏の大きい歌。そして、リズムカルで野放図。自由さを欲しいままに、ぶちまけたような、激しさと快さ、基底に流れるロマンチックな甘さが、いい。

Im so young and youre so old This my darlyng Ive been told----

(収集プロフィール)

ポール・アンカ (Paul Anka, 1941年7月～) カナダ出身のポピュラー・シンガーソングライター。

人物・来歴

レバノンの正教徒移民の子としてオタワで生まれた。1990年にアメリカ市民権を得ている。ニール・セダカやデル・シャノンと共に、ポップスの草創期を代表するシンガーソングライターであり、その草分け的存在。

1957年に自分の弟のベビーシッターへの片思いを綴った自作曲「ダイアナ」"Diana"でデビュー。この曲はいきなりビルボードの1位にランクインした。その後、「君は我が運命」"You Are My Destiny"、「ロンリー・ボーイ」"Lonely Boy"などのヒットを飛ばす。

1960年代半ばからはヒット曲に恵まれず低迷するが、70年代にはトム・ジョーンズに「シーズ・ア・レイディ」を提供。また1974年にフランク・シナトラが引退するという噂を聞いて、彼のためにスタンダード「マイ・ウェイ」を提供する。これは、アンカがとあるシャンソンの曲(Comme d'habitude)の歌詞を英詞で書き直したもの。また、自身もオディア・コーツとのデュエット曲である「二人のきずな」"(You're)Having My Baby"をビルボードの1位にチャートインさせ、復活した。

2002年にはドラマ「ゴールデンボウル」の主題歌に「君は我が運命」が起用され、劇中でもアンカの楽曲が何曲も使用された。

2005年、ハードロック、グランジ、ソウルなどの曲をジャズのアレンジでカバーしたCD『ロック・スウィングス』をヒットさせた。

現在はラスベガスを代表するスターとして活躍している。

主な曲

ダイアナ "Diana" (1957年)

お嬢さんお手やわらかに It's Really Love (1958年)

君はわが運命 "You Are My Destiny" (1958年)

あなたの肩に頬をうめて Put Your Head On My Shoulder (1959年)

ロンリー・ボーイ Lonely Boy (1960年)

恋の汽車ポッポ Train of Love (1960年)

マイ・ホーム・タウン My Home Town (1960年)

電話でキッス Kissin' On The Phone (1961年)

史上最大の作戦 -The longest day (1962年)

マイ・ウェイ "My Way" (1974年)

フリーダム・フォー・ザ・ワールド (1992年)

アミーゴス (1996年)

ボディ・オブ・ワーク (1998年)

ゴールデンボウル～ポール・アンカ・オリジナル・グレイテスト・ヒッツ (2002年)

ロック・スウィングス "Rock Swings" (2005年)

クラシック・ソングス、マイ・ウェイ (2007年)

Songs of December (2011年)

この曲は、オールディーズのなかで、「悲しき街角」などと並んで、常に私のベスト5に入る名曲である。けれど、資料によると、世界のなかで大ヒットしたのは日本だけらしい？ということだ。あらら。日本人（主に、当時の30歳以下）のなかの、特殊な感性に、命中したのかも。列車に乗っているような、基底のゆれとリズムが、心地よい。いちぶ張り裂けるような高音と、哀愁にみちたメロディーが素晴らしい。ラストのフェードアウトして行く、ガロワンウェイ ティケティザ ブルーウー、の繰り返し、心に残る。

（収集プロフィール）

ニール・セダカ（Neil Sedaka、1939年3月～）アメリカ合衆国のポピュラー音楽のシンガーソングライター。ニューヨーク州ブルックリン出身。父はトルコのイズミルから移民したユダヤ系のタクシー運転手、母はポーランド・ロシア系ユダヤ移民。娘は歌手のダラ・セダカ（デラ・セダカ）。

*名門ジュリアード音楽院でクラシックを学ぶ。ティーンの頃からズバ抜けた才能を開花させたニール。彼は、学生時代に出会った作詞家ハワード・グリーンフィールドとのコンビで、50年代後半よりポップス黄金時代を築くことになる。

ハリのある高音ヴォイスと哀愁のメロディの数々は、オールディーズの代名詞となった。日本でもその人気は凄まじく、独自のヒットとして「One Way Ticket(恋の片道切符)」を放ち、また多数のフォロワーを生んだ。60年代中盤以降は低迷するが、活動拠点を英国に移した70年代には人気も復活。75年に出されたアルバム『The Hungry Years』などは90年代に入って、フリー・ソウル世代に再発見された。

略歴

幼少期からピアノを習い、同じアパートに住んでいた作詞家ハワード・Gと共同で曲を作り始める。高校時代には友人たちとポップ・グループ、トーケンズを結成し「ライオンは寝ている」がヒット、その後はジュリアード音楽院で学ぶ。

1958年にコニー・フランシスのために作った「間抜けなキューピッド」が成功を収め注目される。同年にRCAレコードとソロ歌手として契約を結び「おお!キャロル」、「カレンダー・ガール」、「すてきな16才」、「悲しき慕情」などを次々とチャート・インさせ、ポール・アンカと並ぶ全米のトップアイドルとなった。なお、「恋の片道切符」は、歌詞中に「Bye Bye Love」（エヴァリー・ブラザーズ）「Lonely Teardrop」（ジャッキー・ウィルソン）「Lonesome Town」（リッキー・ネルソン）「Heartbreak Hotel」「A Fool Such As I」（ともにエルヴィス・プレスリー）などの当時の全米ポップヒットの題名を織り込んでいることからわかる通り、もともとは「おお!キャロル」のカップリング用に埋め草として録音された曲で、作曲もセダカではないが、哀愁に満ちたメロディと声質が日本人の心を掴んだため、日本ではこの曲が一番のヒットとなった。

レコード会社を移籍後、ビートルズアメリカ上陸の影響を受け、しばらく低迷期を過ごす、1974年には「雨に微笑みを」、エルトン・ジョンと組んだ「バッド・ブラッド」が再び全米No.1

となった。キャプテン&テニールに提供した「愛ある限り」も大ヒットを記録し、完全復活を果たした。この様に才能と実績があるにもかかわらず米国の芸能界は厳しい様で、低迷期には他のスターの前座やドサ廻りをやったりと浮き沈みの大きい人生である。

代表曲の「おお!キャロル」のキャロルとは当時ガール・フレンドだったというキャロル・キングのこと。

彼の曲は米国でもヒットしたが、日本人受けがするのかわからない、ほとんどの曲に邦題がついている。ハリウッド・ウォーク・オブ・フェームとLong Island Music Hall of Fameに名前が刻まれている。

1985年に、TVアニメ『機動戦士Zガンダム』のOPとEDの作曲を手がける（森口博子のデビュー曲「水の星へ愛をこめて」など）。

*オールディーズの定義 通常、1950年代末から60年代。また、広範囲説として、ビル・ヘイリーからビートルズ解散までの説がある。

*『おお!キャロル』 シンプルで底抜けに明るいメロディ、小気味良いバックিং、“オールディーズ”という言葉がぴったり。聴いているだけでハッピーな気持ちに。

*スーパーバード 流れるような哀愁漂うメロディーはもちろんのことアレンジがかっこいい。特にラストでボーカルが終わった後ストリングスがぐわーんと盛り上がって行ってフェイドアウトしていく。B面の「ローズマリー・ブルー」が、しみじみと心にひびく名曲。死を目前にした男が恋人に「泣かないで、君にはこれからの人生がある」と語りかける歌で、ピアノの弾き語り。1950年代末から60年代前半辺りに「カレンダー・ガール」「おおキャロル」など、多くのヒットを連発。ほとんどの曲を、自分で作曲。60年代後半になって歌手としては第一線から退いた。が、70年代になってまた見事復活した。

*1960年代のアメリカンポップスの愛くるしさ、キュートさ、明るさの中の胸キュンな感じ。など、全ての要素が彼のメロディーから感じられます。

代表作品

間抜けなキューピッド (Stupid Cupid、1958年、ビルボード全米チャート第9位、歌・コニー・フランシス)

Fallin' (1958年、全米チャート第30位、歌・コニー・フランシス)

恋の日記 (The Diary、1959年、全米チャート第14位)

おお!キャロル (Oh! Carol、1959年、全米チャート第9位)

星へのきざし (Stairway to Heaven、1960年、全米チャート第9位)

きみこそすべて (You Mean Everything to Me、1960年、全米チャート第10位)

カレンダー・ガール (Calendar Girl、1960年、全米チャート第4位)

恋の片道切符 (One Way Ticket、1960年、日本のみでヒット、セダカの作曲ではない、当時、平尾昌晃もカバーしてヒット)

すてきな16才 (Happy Birthday Sweet Sixteen、1961年、全米チャート第6位)

ボーイ・ハント (Where The Boys Are、1961年、歌・コニー・フランシス、全米チャート第4位)

小さい悪魔 (Little Devil、1961年、全米チャート第11位)

悲しきクラウン (King Of Clowns、1962年)

悲しき慕情 (Breaking Up Is Hard To Do、1962年、全米チャート第1位、グラミー賞ロックンロール部門ノミネート、1976年ジャズ風リメイク版、全米チャート第8位、アダルトコンテンポラリー部門1位)

可愛いあの子 (Next Door to an Angel、1962年、全米チャート第5位) -出だしのスキヤットは1968年に日本で流行ったザ・ダーツの「ケメ子の唄」で使われている。

恋のアマリロ (Is This The Way To Amarillo?、1971年、歌・トニー・クリスティ、全英チャート19位、(1977年にセダカ本人もレコード発表、全米チャート第44位)、コメディ番組の主題歌に取り上げられたこともあり2005年再発売版が全英チャート第1位獲得)

スーパーバード (Superbird、1972年、日本のみでヒット。)

雨に微笑みを (Laughter In the Rain、1974年、全米チャート第1位、外来の音楽がもてはやされ、自分が売れなくなった時のことを歌ったもの。1990年代にはJT『キャスター』のCMソングに起用され、リバイバル・ヒットした。のちにレイ・コニフ・シンガーズがカバーしている)

バッド・ブラッド (Bad Blood、1975年、全米チャート第1位、歌にエルトン・ジョンが参加)

愛ある限り (Love Will Keep Us Together、1975年、歌・キャプテン&テニール、全米チャート第1位、グラミー賞最優秀レコード賞)

ソリティア (Solitaire、1976年、全米チャート第12位、歌・カーペンターズ、エルヴィス・プレスリー)

華の昭和名歌300 第 100 号 : ボーイ・ハント (原題 Who's Sorry Now?) コニー・フランシス

オールディーズ・ポップスの女王、と称されている。これは、多くの人が異論なし、ということだろう。巨大といって、過言ではない、実績のある歌手である。私にとっては、突き抜けるような、甘い高音が印象的な歌手。もちろん、群を抜く上手さである。

Where the boys are, someone waits for me

ここでは、少年たちは、誰かを待つ

A smiling face, a warm embrace

にこやかな顔は、温かい抱擁

Two arms to hold me tenderly

2本の腕が優しく私を保持するために

Where the boys are, my true love will be

ここでは、少年たちは、私に本当に愛されます

He's walking down some street in town-----

彼は町の通りを歩いていくつかの

(収集プロフィール)

コニー・フランシス (Connie Francis、1938年12月～) アメリカ・ニュージャージー州ニューアーク出身の歌手・女優。イタリア系。

経歴

11歳の頃からショーに出演し、1955年に「Freddy」で歌手デビューしたが、しばらくヒット曲は出なかった。

1958年にリリースされた「Who's Sorry Now?」が大ヒットしてからは、1960年代前半にかけてヒット曲を連発。1961年には「Together」がヒットし、『ビルボード』誌のアダルト・コンテンポラリーのシングルチャートで女性として初めて1位を獲得した。

1974年、ニューヨークでホテルに滞在中、不法侵入した黒人男性から強姦被害を受ける。犯人は未だに逮捕されていない。その後、安全性を確保しなかったとしてモーターチェーンを提訴した。結果、300万ドルを支払うよう判断が示された。精神的ショックを受けた彼女は、その後結婚をしなかった。世界各国でヒット曲がカバーされており、日本では弘田三枝子や中尾ミエなどがカバーしヒットしたことで知られる。

民族舞踊を意識する「Misirlou (ミザルー)」を歌っている (歌詞がある)。のちに「パルプフィクション」や「TAXi」シリーズで有名なディック・デイルのギターによる曲調ができる (こちらは詞はない)。

主な曲

フーズ・ソリー・ナウ (Who's Sorry Now?)

1958年2月発売。ビルボード最高4位。自身初のミリオンセラー。モノラル録音。なかなかヒットに恵まれず、歌手を辞めようかと思っていたが、大好きな歌をどうしても捨てることできな

った。「とりあえずもう1枚レコードを出し、それがヒットしたら歌手を続け、ヒットしなかったら歌手を辞めよう」と考え、最後の1枚のつもりで出したのが、この「フーズ・ソリー・ナウ」であった。この曲が無ければ、後年の大スター“コニー・フランシス”も無かった。まさに、彼女の人生を変えた曲である。

*コニーが1961年にヒットさせたバラードで、数あるオールディーズ・バラードの楽曲の中でも最高傑作と言っていい。ハワード・グリーンフィールドとニール・セダカという作詞・作曲コンビによって生み出されたこの名曲は、彼女が初めて出演した同名映画の主題歌としてリリースされたもの。特に日本ではコニーの代名詞とでも言える曲で、当時はレコードが爆発的に売れ、後に彼女自身が歌った日本語バージョンまでリリースされたほど。

1962年7月発売。ビルボード最高9位。ステレオ録音。同年に青山ミチ、伊東ゆかり、金井克子、弘田三枝子、安村昌子らによる競作でカバー。弘田三枝子盤が20万枚、青山ミチ盤が3万枚のヒットとなる。2002年、映画『ナースのお仕事ザ・ムービー』主題歌として観月ありさがカバー（「朝倉いずみ with ナースのお仕事」名義）。

ボーイ・ハント(Where The Boys Are)

1961年1月発売。ビルボード最高4位。ステレオ録音。

カラーに口紅(Lipstick On Your Collar)

1959年5月発売。ビルボード最高5位。ステレオ録音。

泣かせないでね(Don't Break The Heart That Loves You)

1962年1月発売。ビルボード最高1位。ステレオ録音。

間抜けなキューピッド(Stupid Cupid)

1958年7月発売。ビルボード最高14位。モノラル録音。

アamong・マイ・スーベニル(Among My Souvenirs)

1959年11月発売。ビルボード最高7位。モノラル録音。

マイ・ハピネス (My Happiness)

1958年11月発売。ビルボード最高2位。ステレオ録音。

アム・ソーリー・アイ・メイド・ユー・クライ(I'm Sorry I Made You Cry)

1958年4月発売。ビルボード最高36位。モノラル録音。

*日本独自のヒット曲

可愛いベイビー(Pretty Little Baby)

アメリカではシングル発売されておらず、日本独自のヒット曲である。ステレオ録音。

1962年に中尾ミエ（ビクター）、森山加代子（東芝）、沢リリ子（テイチク）、後藤久美子（コロムビア）の4社競作でカバー。中でも中尾ミエ盤が一番売れた。

夢のデート(Someone Else's Boy)

ロリポップ・リップス(Lollipop Lips)

アメリカでは発売されず。日本独自のヒット曲。渡辺トモコや「九重佑三子とダニー飯田とパラダイス・キング」が競作でカバーした。

大人になりたい(Too Many Rules)

1961年発売。ビルボード最高72位だったが、日本では伊東ゆかり、後藤久美子などの歌で大ヒットした。

「悲しき---」が付くと、まず「悲しき街角」か「悲しき雨音」が浮かんでくるのが、一般的だろう。ほかにも「悲しき悪魔」「悲しきインディアン」「悲しき片思い」「悲しき60歳」「悲しき慕情」「悲しきこだま」「悲しきクラウン」などがある。曲調はまったく違うのに、悲しき、の付く邦題がひとつヒットすると、つい類似のタイトルが次々と出てくる。でも、その内の10曲前後が名曲なのだから、この勃興期の米国Mシーンのすごさが実感できるようだ。この曲は、いい曲だとは思いますが、私のなかでは、オールディーズの40位くらいになるだろう。彼の、ほかの代表曲も2、3聴いてみたが、あまりピンとこなかった。まだ、アメリカ文化が、多くの日本人の憧れだった時代だが、文化の土台が、違うからだろうか。それとも、個人の嗜好なのだろうか。

なぜ君は俺の元から (to me) 去ってしまったんだ 今は淋しくて死んでしまいそうだ (as lonely as could be) 涙がこぼれ落ちる (a teardrop fall) と 玄関 (hall) のを出て行く君の足音が聞こえてくるんだ---

(収集プロフィール)

スティーヴ・ローレンス (Steve Lawrence、1935～)

米国ニューヨーク・ブルックリン生まれ。ポップシンガー、ソングライター、および妻の[Eydie Gorme]とのデュエット(1954結成,1957年12月29日結婚)で知られる。

*「悲しき足音」は1960年全米7位のヒット曲で、日本でも1961年国内年間ベスト20の19位にラン〜クされる人気。彼はR & RシンガーでもR & Bシンガーでもなく、純粋な白人ポップス・シンガー。フーステップ、フーステップと軽い感じで歌って、聴くと心が「癒される」気持ちに。オールディーズの名曲。彼はバリー・マンと巡り合って、この曲をヒットさせることが出来た。彼には全米1位の「Go Away Little Girl かなわぬ恋」のヒットがある。この曲を書いたのは、ジェリー・ゴフィンとキャロル・キングのソングライターチーム。

主な曲

FOOTSTEPS

Go Away Little Girl

YOU D'ONT KNOW

この曲がツイスト仕様だったとは、原語のタイトルを見るまで知らなかった。私にとっては不思議な曲で、若い頃は、それほど心に響かなかった。けれど加齢とともに、じょじょに、心に食い込んでくるようになった。全編に渡って軽快なリズムなのだが、どこかしら物憂く、気だるく、そこはかたなく不気味で、スリリングな曲調が、次第に高まってゆくのだ。

(収集プロフィール)

ミーナ (Mina、1940～) イタリアの歌手。本名はアンナ・マリーア・マッツィーニ (Anna Maria Mazzini)

来歴

ロンバルディア州ブスト・アルシーツィオに生まれ、クレモナで育つ。クラブ歌手からスタートし、1958年にデビュー。1959年に「ネッスーノ」をヒットさせ、抜群のスタイルと美貌もあって一躍トップスターとなる。1963年に私生児を出産し、一時期、テレビ・ラジオから追放されるが、その後、再起、数々のヒットを飛ばす。しかし、1974年以降はテレビやコンサートへの出演をやめ、アルバムの製作やライブ活動に専念した。1960年代にはいくつかの日本語盤も出している。私生活は恋人や配偶者との離・死別を繰り返し、必ずしも恵まれたものではなかった。

1961年(昭和36年)5月に来日している。

*『太陽はひとりぼっち』(たいよう、イタリア語: Eclipse / 英語: The Eclipse) は、1962年(昭和37年)製作・公開のイタリア・フランス合作映画。ミケランジェロ・アントニオーニ監督の傑作映画の一つ。大人の愛の不毛を描いた名画。主題曲も多くのカバーを生んだ。モーリス・ルクレール楽団版とコレット・テンピア楽団とヌーベル・マリーエ楽団、ベンチャーズ版とある。1962年度カンヌ映画祭審査員特別賞受賞。

*映画キャスト

アラン・ドロン

モニカ・ヴィッティ (Monica Vitti, 1931年11月～)

フランシスコ・ラバル

*太陽はひとりぼっち (1962)

日本では森山加代子、ザ・ピーナッツらによって「Tintarella di luna」が「月影のナポリ」として、また、弘田三枝子、伊東ゆかり、ザ・ピーナッツらにより「Un Buco Nella Sabbia」が「砂に消えた涙」としてカバーされている。

イタリアのエルヴィス・プレスリー、と称されていたという。今回、4、5曲聴き直して、過大な呼称、だったかもと感じた。それぞれムーディーで、洒落た甘い歌で、かなりいいのだが。この曲は、特に訴える哀愁と甘さを持っている。けれど、プレスリーの残した業績と、ボビー・ソロの作り上げた世界と、比較になるのだろうか？

(耳コピ)

ダウナラクリマ スルヴィーゾ オカピート モルテ コーゼ ドポ タンティ タンティ
メー ジオラソウオ コザソノ ペルテ ウーナズ グワルドゥラー——

(収集プロフィール)

ボビー・ソロ (Bobby Solo、1945年3月～) イタリアのポップス歌手。

略歴

ローマに生まれる。エルヴィス・プレスリーのファンであり、リコルディ・レコードと契約し、1963年「Blu é blu ブルー・オン・ブルー」をカバーしてデビュー、新人の登竜門であった第1回「フェスティバルへの脚光」に優勝した。1964年のサンレモ音楽祭に出場、実の姉妹に捧げて自ら作曲した「Una lacrima sul viso ほほにかかる涙」を歌って入賞し、この曲はイタリアで初のミリオンセラーを記録している。このときのパートナーはフランキー・レインであった。1965年には「Se piangi se ridi 君に涙とほほえみを」、1969年には「Zingara 涙のさだめ」でサンレモ音楽祭2度の優勝を飾り、一時代を築いた。1980年代には、ロザンナ・フラテッロ、リトル・トニーとともにRobotというユニットで活動している。また、1985年には日本信販のCMにもボビーの曲が使用された経緯がある。

主な曲

思い出にさよなら

さすらいの彼方

アルバム

1964年 Bobby Solo (Dischi Ricordi)

1965年 Il secondo LP di Bobby Solo (Dischi Ricordi)

1966年 La vie en rose (Dischi Ricordi)

(中略)

1983年 Special '83 (EMI Italiana)

1986年 Solo...Elvis (Five Record)

華の昭和名歌200 第 100 曲 : サンライト・ツイスト (Go-kart Twist) ジャンニ・モランディ

私は、基本的には、演歌・歌謡曲系の人なので、オールディーズの分野は、面映く、困惑気味。けれど、私の思春期とほぼ同時代の文化。見渡すと、すこし違う切り口から喋れるようなので、この分野も、10年くらい掛けて、完成したいと思っています。宜しく、どうぞ。気を永く、お持ちくださいますように。

さて、この曲は、当時、人気アイドルだった、カトリーヌ・スパーク主演のイタリア映画「太陽の下の18歳」(Diciottenni al sole)の挿入歌、1963年の秋に大ヒット。本来の主題歌は、ジミー・フォンタナの映画同名曲。そのB面が、この曲(原題は「ゴーカート・ツイスト」)なのだ。日本でのヒット当時、ラジオやテレビから、よく流れてきた。この曲は、底抜けに明るい、生の喜びの歌なのだろう。が、私はその底に、哀愁を感じてしまうタイプなのだ。モランディの歓喜に満ちた歌声の部分と、反対に何度か挟み込まれる、喪失感に満ちた歌唱が、心に響くのだ。エジレジーレ バァイ、この核のフレーズが、心に響くのだ。

E gira e gira e vai E non frenare mai

E gira e gira e vai E non fermarti mai

Mettiti il casco esatta sul go-kart

E vai e vai col go go go-kart

E ballerai il twist del go-kart

Twist go-kart and twist go-kart

(ほら、回って回って ぜったいブレーキを踏まないで ほら、回って回って ぜったい止まらないで ヘルメットをきちんとかぶって ゴーカートをどんどん走らせるんだ ゴーカートのツイストを踊るんだ ツイスト、ツイスト、ゴーカートのツイストを)

(収集プロフィール)

ジャンニ・モランディ (Gianni Morandi、1944～) イタリア・ボローニャ (Moagidoro説あり) 生まれの歌手兼俳優。現在も数々の歌謡祭やTV等で活躍をしている。

1944年12月11日イタリアで生まれ、1962年にデイトタイム (Andavo a cento all'ora) でデビュー。'64年に初来日、帰国後イタリアで「貴方にひざまづいて」(In ginocchi da te)が大ヒットしました。この後もファンの皆さんならずすでにご存知だと思いますが出す曲全てとっていいほどヒットしました。66年に、「貴方にひざまづいて」で共演したラウラ・エフリキアンと結婚。2児をもうけるが、79年に離婚、現在アンナとの間にピエトロという男の子(7歳)がいます。日本には過去4回来日しています。

*かたすみでひっそりと・より

1962年 太陽の下の18歳の挿入歌「サンライト・ツイスト」が日本でヒット。

1964年 「貴方にひざまづいて」カンタジーロで優勝、「愛をあなたに」バラのフェスティバルで優勝。

1965年 「君なしには生きられない」カンタジーロ準優勝、ちなみに優勝者はリタ・パヴォ

ーネ「ルイ」

1966年 「貴方にひざまづいて」日本で上映、「8月15日の夜」カンタジーロ優勝

1968年 「キメラ」カンタジーロ準優勝、ちなみに優勝者はカテリーナ・カセルリ「愛の面影」

1969年 「雨が降ってきた」カンツォニッシマ優勝

1970年 「あなたへの愛」カンツォニッシマ優勝

1971年 「カプリッチョ」でカンツォニッシマ準優勝ちなみに優勝者はマッシーモ・ラニエリ

1972年 「青春の汗」でサン・レモ音楽祭初出場

1976年 「愛の水辺」第7回世界歌謡祭参加

1987年 「Si Puo Dare Di Piu'」日本語タイトル「もっと、もっと」サン・レモ歌謡祭優勝
Morandi,Ruggeri,Tozzi のベテラン3人で歌う。

1995年 「In Amore」バラバラ・コーラと組んでサン・レモ出場2位

2000年 「I n n a m o r a t o」サン・レモ音楽祭3位

*やっぱ、夏の歌でトップクラスにランキングするのは…エジレジレバイだ。

*ジャンニ・モランディが歌った「サンライト・ツイスト」です。エジレジレバイと歌う歌詞が、何かジリジリする夏い暑を感じさせました。

E gira e gira e vai. E non fermarti mai.

E gira e gira e vai. E non fermarti mai.

*Mixed Moss 雑多な苔・より

そのなかで、唯一例外的に印象に残った歌が、ジャンニ・モランディの歌った1962年のヒット曲「サンライト・ツイストGo-Kart Twist」である。イタリア語だから何を言っているのかさっぱりわからなかったが、とにかく軽快で楽しい歌だと思った。

(ぜったいブレーキを踏んじゃダメ ゴーカートを走らせるだけさ そしてゴーカート・ツイストを踊るんだ ツイスト、ツイスト、ゴーカートのツイストを きみがしなくちゃいけないのはぐるぐる回って、アクセルを踏むこと そして叫んで、ツイストを踊ること ゴーカート・ツイストを これがツイスト これがツイスト これがゴーカートのツイストさ！)

他愛もない歌詞だが、モランディの声はそれにふさわしく乾いていて心地よい。サウンドの薄っぺらさもこの歌にふさわしい。しかし、作曲はいまでは映画音楽の大御所になっているエンニオ・モリコーネ。モリコーネはこの頃けっこうポピュラーソングを書いている。これも40年以上昔の歌とは思えないぐらいよくできていると思う。映画もヒットし、ツイストが大ブーム。

☆1962年のイタリア映画『太陽の下の18才』の挿入歌として作られ、当時まだ新人だったジャンニ・モランディによって歌われ大ヒットとなった曲。タイトルのとおりツイストの軽快なリズムを使い、それでいて哀愁あるメロディーラインも持ち合わせていて良くできた曲。

オリジナルは、米国歌手の、ジーン・ピットニー。(それ以前からあったのかは、不明)例に依って、漣健児氏の、訳作詞が素晴らしい。ピットニーのほうも、たくさん聴いたが、サビや強調するところが、日本人の感覚とは違い、不思議で楽しかった。

飯田は、私の思春期の前後、とても人気のあった歌手である。すこしニヤケ顔だったが、わりとハンサムで、スマートだった。ただ、必要以上に、身体をくねらせて、踊っていた記憶がある。唄は、特に上手いとは思えなかったが、当時の機器の性能を考慮すると、かなりの実力があつたのだろう。その後、テレビなどの表舞台からは、徐々にフェードアウトしていったが、裏方に転じ、プロデューサーとして、大成功したのだという。とまれ、人生の成功者となったのは、その強靱な精神に敬意を表すべきであろう。

あの子は ルイジアナ・ママ やって来たのは ニューオリンズ 髪は金色 目は青く
本物だよ ディキシーキン---/スクスク ドドンパ チャチャチャ 踊ろうよディキシーキン---

(収集プロフィール)

飯田 久彦 (いいだ ひさひこ、1941-) は歌手・音楽プロデューサー。東京都出身。芝浦工業大学工学部中退。現在はエイベックス取締役。歌手時代の愛称はチャコ。

自称"歌い手くずれ"。坂本九の薦めで歌手としてデビュー、瞬く間にスター街道を昇りつめトップスターの座を射止めるものの、70年代に裏方であるディレクターへの転身を図る。松崎しげるの「愛のメモリー」をきっかけに、ピンクレディー/桜田淳子/小泉今日子など、アイドルのヒットに貢献。90年代には、プロデューサーとしてSMAPや河村隆一を担当し、現在テイチクの代表取締役社長と、世にも稀な経歴を誇る人物だ。

歌手としては、61年に米国歌手デル・シャノンの名曲「悲しき街角」で世に出る。この曲は、英詞を日本語訳した洋楽ポップス・カヴァーの先駆となるのと同時に、大ヒットも記録。続く、「ルイジアナ・ママ」(これもカヴァー)も連続して大ヒット。その親しみやすい容貌から、"チャコ"の愛称で親しまれ、コンサートの行われた日劇では、ファンが会場を二重に取り囲んだという逸話もあるくらいの人気者であった。しかし70年代には、時代の流れと共に歌謡曲へシフトしていき、その人気も下降線を辿る。そこで、裏方へと転向するのである。

多くの歌手が、一度でもスターの座から転げ落ちると、二度とそこには昇れないのだが、飯田は、裏方としても再度成功を収めた。後にも先にも、例がない存在だろう。

略歴

1961年 - 『悲しき街角(Runaway)』で歌手デビュー。

1962年 - 『ルイジアナ・ママ(Louisiana Mama)』が大ヒットとなるが、その後人氣が低迷。

1975年 - 日本ビクター入社。ディレクターとして松崎しげる、ピンク・レディー、小泉今日子らを担当

1988年 - ゲームミュージックのアルバム『ナムコット ゲーム ア・ラ・モードVol.2』の収録曲「恋のダーク・ホース」(ゲーム『ファミリージョッキー』のアレンジ曲)にて、久々にマイクを

取る。

1990年代にはプロデューサーとして活動。

1999年3月 - ビクター専務取締役役に就任

1999年6月 - テイチク代表取締役社長に就任

2005年6月 - テイチク代表取締役会長に就任

2006年11月 - エイベックス取締役役に就任

逸話

大ヒット曲『ルイジアナ・ママ』のサビ、「from New Orleans」の発音が巻き舌のため、当時の視聴者には「ホニオリン」（または「ロニオリン」）と聴こえたという。後年、ナツメロ番組で歌った際には「フロム・ニューオリンズ」と、日本語英語で聞き取りやすい歌い方をしていた。

私が子供のころ、彼女は、その当時のメディア（白黒テレビやラジオ、商店街の流す音楽、週刊平凡・明星など）で、大活躍していた。坂本九やパラダイス・キングなどとともに。当時の機器の性能でも、彼女の歌唱は素晴らしく、私は、森山はいずれ大歌手になると、思っていた。ところが、ある時期から、彼女は、マスコミにほとんど姿を見せなくなった。長い間、不思議に思っていたが、8年後「白い蝶のサンバ」で復活。それによって、その理由がハッキリとした。彼女は、ある大手芸能プロから、契約満了で独立したのだが、そこからプロモーションが、うまくいかなくなってしまったのだ。理由は、すこし違うが、最近では、鈴木あみの話題があったように、こういうケースは、複雑な問題を孕んでいるのだ。森山は、その間、キャバレーなどの地方のドサ回りがほとんどで、声を荒らしてしまった。運よく復活はしたが、森山は、大歌手になるための、重要な時期を失ってしまった。古いしきたりや独自のルールは、理解できるが、考えてみれば、気の毒であり、またとても怖いことだ。スケールは小さくなるが、黛ジュンも、同様のケースといわれている。

（詞・曲 F.Migliacci・B.De Filippi 訳詞・岩谷 時子）

そしてお月様 ねえ彼を帰して---チンタレラデイルナ あの人を街で---

（収集プロフィール）

森山 加代子（もりやま かよこ、1942-）は、北海道出身の歌手。

略歴

1960年代を中心に活躍し、洋楽をベースとしたコミカルなイメージのヒットソングを多く持つ歌手である。ニックネームは「かよチャン」。

札幌のジャズ喫茶で歌っていたところをスカウトされて、デビュー。1960年、デビュー曲「月影のナポリ」が50万枚を売り、いきなりの大ヒット。続く「メロンの気持」「月影のキューバ」などヒットを連発。また新人としては異例の早さで同年のNHK紅白歌合戦に初出場した。以降洋楽をベースにしたコミカルな歌を何枚もリリース。特に1961年リリースの「じんじろげ」は強烈な歌詞と共に、流行語にもなったほどでもあった。

数年の低迷期を経て、27歳で結婚。

結婚後の1970年にリリースした「白い蝶のサンバ」は従来のイメージをガラリと変えたポップな歌謡曲であるが、これも大いにヒット、ミリオンセラーとなる。

現在も、舞台やショーで歌手として活躍している。

主な曲

「月影のナポリ」（ザ・ピーナッツとの競作）

「メロンの気持」

「月影のキューバ」（洋楽『MAGIC MOON』カバー）

「じんじろげ」（作詞 渡舟人、作曲 中村八大）

「ズビスビズー」（洋楽『ZOO BE ZOO BE ZOO』カバー）

「パイノパイノパイ」（オリジナルとは歌詞が違う）

「可愛いベイビー」 (中尾ミエのバージョンでも有名な曲)

「白い蝶のサンバ」 (作詞阿久悠、作曲井上かつお)

「レモンのキッス」

など

紅白出場曲

第11回 1960年 (デビュー年)

月影のキューバ

第12回 1961年

シンデレラ (訳詞 みなみかずみ)

第13回 1962年

五ひきの仔ブタとチャールストン

第13回 1970年 (8年ぶりの出場)

白い蝶のサンバ

私がこの曲をはじめ聴いたのは、お祭りで呼ばれた、友人の家でだった。ソフトな唄いぶりと、ほのかな哀愁と、演歌・歌謡曲系とは別種の、淡く心地よい望郷。けれど、それらが纏まると、深い聴後感を残す。ほかに、ホリデイやディスコ系のナンバーも傑作。

Feel I'm goin' back to Massachusetts, Something's telling me I must go home. And the lights all went out in Massachusetts The day I left her standing on her own.――

(マサチューセッツに帰りたい気持がする 何か帰ったほうがいいって言っているみたいだ マサチューセッツの灯りはすべて消えた 彼女の1人残してきた日に)

(収集プロフィール)

ビージーズ(1963～、英: Bee Gees) 英国王領マン島生まれのイギリス人の三人兄弟を中心に構成された、男性ボーカルグループ。1963年にオーストラリアよりレコードデビューし、1973年からは米国を中心に活動。1955年から2003年まで息の長い活動を続け、

「[Massachusetts](#)」「Holiday」「[How Deep Is Your Love](#)」「[Stayin' Alive](#)」「[Night Fever](#)」など、数多くのヒット曲を発表した。2003年、メンバーのモーリス・ギブが急逝し、グループとしての活動に終止符を打ったが、2009年から活動を再開した。2012年5月20日、[ロビン・ギブ](#)が死去

デビュー以前からオーストラリア時代まで

ギブ兄弟は、オートバイレースで著名な英国マン島に生まれた。1946年9月1日にバリー、1949年12月22日にロビンとモーリスが二卵性双生児として誕生。1950年に父の故郷、[イングランド](#)、[マンチェスター](#)に移る。

1955年、ギブ兄弟は教会の合唱団に所属しキャリアをスタートさせる。自宅の近所には、後にハーマンズ・ハーミッツのリード・ヴォーカルとして英米で大人気を博す[ピーター・ヌーン](#)一家が居り、ギブ一家とは家族ぐるみの付き合いをしていた。1958年、父の仕事の都合に因り家族7人(両親、バリー、ロビン、モーリス、姉のレスリー、末っ子アンディ)でオーストラリアのクイーンズランド州[ブリスベン](#)に移住。一番下の弟、[アンディ](#)(1958年3月5日-1988年3月10日)はマンチェスターで生まれたばかりだった。ここで兄弟は、小遣い稼ぎに唄うようになる。最初のグループ名はラトルスネークス(Rattlesnakes)、その後、ウィー・ジョニー・ヘインズ&ザ・ブルーキャッツ(Wee Johnny Hayes & the Bluecats)になった^[3]。

そして3人はラジオのDJ、ビル・ゲイツ(Bill Gates, [マイクロソフト](#)創業者とは別人)に紹介される。紹介者は、レーサーのビル・グード(Bill Goode)。ゲイツは、自分とグードのイニシャル(BG)から彼らのグループ名をBee Geesとつける。1960年に入るとテレビとラジオのレギュラー番組を持つようになり、1963年にフェスティバル・レコードより『三つのキス』でレコードデビューする運びとなり、以後は国民的規模の人気を博すこととなる。英米ミュージシャンの多くは黒人音楽に少なからずも影響を受けたが、ビージーズはエヴァリー・ブラザーズからの影響を強く受けた。

メンバー紹介および第一期 - 第三期黄金時代から1980年代末まで

ビーゼズはギブ3兄弟を中心に結成されたが、1972年からは完全に兄弟のみのトリオ編成となった。全員共通してボーカルを担当。

- **バリー・ギブ (Barry Gibb)** (1946年9月1日-) … 身長 (182cm) で、ビーゼズ結成から数多くの楽曲は彼が作曲し、リードボーカルを担当。70年代中期以降、**ファルセット**唱法を積極的に導入した。
- **ロビン・ギブ (Robin Gibb)** (1949年12月22日 - 2012年5月20日) … モーリスとの二卵性双生児で次男。一時的に脱退し、その後復帰した。ソロ活動も積極的に行った。2012年5月20日病死。
- **モーリス・ギブ (Maurice Gibb)** (1949年12月22日 - 2003年1月12日) … 三男。ギター、**ベース**、そしてロビン同様に**オルガン**、**メロトロン** (ビートルズの**ストロベリー・フィールズ・フォーエバー**のイントロ部分でも使用された鍵盤楽器)、**ハープシコード**などの楽器を演奏することができた。グループのライブバンドのバンドマスターでもあり、ステージではベースやオルガンを演奏することが多かった。2003年1月12日急逝。

1966年にはオーストラリアで最優秀ボーカルグループに選ばれ、翌1967年2月、シングル『**スビックス&スペックス**』が全豪NO.1ヒットしている頃、オーストラリアでの大人気に着目した**ビートルズ**のマネージャーである**ブライアン・エプスタイン**は、自らが経営する**NEMSエンタープライズ**に入社したての新人**ロバート・スティッグウッド**をオーストラリアへ赴かせ、ギブ兄弟に**ワールド・デビュー**の契約を持ち掛ける。

イギリスに帰国したギブ兄弟は、オーストラリア**クイーンズランド州**生まれで**ロンドン**育ちのドラマー、**コリン・ピーターセン** (1948年生れ)、そしてオーストラリア時代から彼らのレコーディングに度々参加していた**シドニー**出身の**ヴィンス・メロニー** (1945年生れ) をリードギターに迎え、5人編成として1967年5月に**ポリドール・レコード**本社より『**ニューヨーク炭鉱の悲劇**』でレコード・デビュー。アメリカでの発売元である**アトコ・レコード** (アトランティック・レコードの子会社) が、新人では前代未聞の25万ドルで契約し、話題騒然となる。

以後、「**ラヴ・サムバディ**」、「**ホリディ**」、「**マサチューセッツ**」 (全米11位)、「**ワールド**」、1968年に「**ワーズ**」、「**ジャンボー**」、「**獄中の手紙**」 (初の全米TOP10入り)「**ジョーク**」 (同じく全米TOP10ヒット)、同年末にヴィンスがプロデューサー業に転向するため正式に脱退、翌1969年春、3rdアルバム『**オデッサ**』、シングル「**若葉のころ**」を発売間もなくロビンがソロ・シンガーになるべく独立 (シングル「**救いの鐘**」は英国のみでヒット)、同年夏シングル「**トゥモロウ・トゥモロウ**」を最後にバリーとモーリスが一方向的にコリンを解雇してしまう、これによって2人となったビーゼズは「**思い出を胸に**」を全英TOP10に送り込むも、翌1970年春先にシングル「**I・O・I・O**」、アルバム『**キューカンバー・キャッスル**』発売直後の兄弟喧嘩に因って空中分解。その後、それぞれソロ・シングルを発表するも芳しい結果は出せず、同年9月にバリー、ロビン、モーリスの3人は固い結束の下に改めてビーゼズとして再出発することを誓う。

10月に再スタート第一弾アルバム『**2Years・On**』を発売、翌71年1月にシングルカットされた「

ロンリーデイ」を全米3位（キャッシュボックス誌では1位）とし続くシングル「傷心の日々」は念願の全米No.1となるが、アルバムセールスは低調だった。コリン解雇後はジェフ・ブリッジフォードがドラムを叩いていたものの1972年春、初の来日公演（日本でもアイドル人気だった1969年に予定されていたがメンバーの脱退などの諸問題で、延び延びとなっていた）寸前に解雇される。

1973年に、マネージャー兼プロデューサーでもあるロバート・スティッグウッドが設立したRSOレコードへ移籍し、アメリカでの発売元であるアトコ・レコード（アトランティック・レコードの子会社）でかつては、ヤング・ラスカルズなどを手掛け華々しい経歴の持ち主であるアリフ・マーティンのプロデュースを受け、アルバム『ライフ・イン・ア・ティン・キャン』をリリース。マンネリ化した従来のストリングスサウンド（1967年～ステージではバックに30人編成から成るストリングス・オーケストラを付けていた）からリズム主体のファンキーなサウンドへと脱皮を図ったものの、ファンからは「売れるためにサウンドを変えた」と猛反発され、翌1974年のアルバム『ミスター・ナチュラル』も不発に終わる。

1975年に芸能生活20周年記念アルバムでもある『メインコース』からシングルカットされた「ジャイヴ・トーキン」、「ブロードウェイの夜」がディスコブームに乗り、全米大ヒット。これより第三期黄金時代の幕開けとなる。以後も、ダンスナンバーを中心とするコンテンポラリー路線を手掛け、1978年には半年以上も彼らが手掛けた楽曲がNo.1を占めるなどの快挙を達成（ビートルズ、シュプリームス、カーペンターズ以来）。1981年のアルバム『リビング・アイズ』がマイナーヒットに終わって以降は、各自のソロ活動と並行して他アーティストへの楽曲提供が活動の中心となり、数多くの全米ヒットを生み出す。

1987年にワーナー・レコードに移籍し、アルバム『E・S・P』よりシングル・カットされた「You・Win・Again」は、全英TOP10ヒット。1989年には、シングル「One」が久々に全米TOP10ヒットになるものの、Rolling Stone誌では"Unwelcome Back Band"と酷評される。モリス死亡後はロビンは再結成の意向はないと表明したが、現在では必ずしもこだわってはいない、とのこと。

サタデー・ナイト・フィーバー&STEIN・アライブ

ディスコで大人気を誇っていたビージーズのナンバーを大きく取り入れた映画『サタデー・ナイト・フィーバー』が、1977年に公開された。1998年にミュージカル版もロンドンで製作され、翌年にはブロードウェイ公演も果たし、日本公演は2003年に新宿コマ劇場で行われた。続編である映画『STEIN・アライブ』もヒットする。

業績・受賞

全世界で2億3,000万枚を超えるレコードを売り上げており、現在に至るまでビートルズ、エルヴィス・プレスリー、マイケル・ジャクソン、ポール・マッカートニーと並んで、音楽史上最も成功した上位5組に数えられる。彼らの楽曲は古くはエルヴィス、近年はデスティニーズ・チャイルドといった日本においても知名度の高いアーティストらによってカバーされている。1971年から1979年にかけて米国のビルボードチャートに9曲のナンバーワンヒットを送り出した^[4]。1978年の3月には、製作に携わった4つの楽曲が上位5位にランクインした。この記録は、ビートルズ

が1964年の4月に上位5つ全てを独占した記録に次ぐ偉業である。1977年の最終週から1978年の8月までの32週に亘り、携わった楽曲が常に1位の座を独占し続けた。イギリスに於いては、ビートルズの28曲に次ぐ19曲がナンバーワンヒットを記録した。活動期間中に5つのグラミー賞を獲得した。1997年に、アーティストの殿堂とロックの殿堂⁵¹、2001年にはボーカルグループの殿堂、2004年9月20日にダンスミュージックの殿堂入りを果たし、音楽史上初めて4つの殿堂入りを記録した。他にも、「英国の音楽に多大な貢献を行ったアーティスト」の栄誉も受賞した。

主な曲

- ニューヨーク炭坑の悲劇 - *The New York Mining Disaster 1941* (1967年)
- [ラヴ・サムバデ](#) - *To Love Somebody* (1967年) - 全米17位, 全英41位
- 誰も見えない - *I Can't See Nobody* (1967年) - 日本に於いては「ニューヨーク炭鉱の悲劇」のB面
- [マサチューセッツ](#) - *Massachusetts* (1967年) - 全米11位, 全英1位
- ホリデイ - *Holiday* (1967年) - 全米16位 (日本に於いては「マサチューセッツ」のB面)
- ワールド - *World* (1967年) - 全英9位
- [ワーズ](#) - *Words* (1968年) - 全米15位, 全英8位
- ジャンボ - *Jumbo* (1968年) - 全米57位, 全英25位
- 恋するシンガー - *The Singer Sang His Song* (1968年) - 全米116位 (日本に於いては「ジャンボ」のB面)
- 獄中の手紙 - *I've Gotta Get A Message To You* (1968年) - 全米8位, 全英1位
- ジョーク - *I Started A Joke* (1968年) - 全米6位
- [若葉のころ](#) - *First Of May* (1969年) - 全米37位, 全英6位 - 日本では同名のドラマ『[若葉のころ](#)』(1996年、TBS)の主題歌となっている。
- トゥモロウ・トゥモロウ - *Tomorrow, Tomorrow* (1969年) - 全米54位, 全英23位
- 思い出を胸に - *Don't Forget To Remember* (1969年) - 全米73位, 全英2位
- イフ・オンリー・アイ・ハッド - *If Only I Had My Mind On Something Else* (1970年) - 全米91位 (シングルとしては日本未発売)
- アイ・オー・アイ・オー - *IOIO* (1970年) - 全米94位, 全英41位
- ロンリー・デイ - *Lonely Days* (1971年) - 全米3位, 全英33位
- [メロディ・フェア](#) - *Melody Fair* (1971年) - 映画『[小さな恋のメロディ](#)』の主題歌として、日本でのみシングル・カットされ大ヒット。(オリコン3位)
- イン・ザ・モーニング - *In The Morning* (1971年) - 映画『[小さな恋のメロディ](#)』の主題歌として日本でのみシングル・カットされた。(オリコン36位)
- 傷心の日々 - *How Can You Mend A Broken Heart* (1971年) - 全米1位
- 過ぎ去りし愛の夢 - *Don't Wanna Live Inside Myself* (1971年) - 全米53位
- マイ・ワールド - *My World* (1972年) - 全米16位, 全英16位
- ラン・トゥー・ミー - *Run To Me* (1972年) - 全米16位, 全英9位
- アライヴ - *Alive* (1972年) - 全米34位

- 希望の夜明け - *Saw A New Morning* (1973年) - 全米94位
- ひとりぼっちの夏 - *Wouldn't Be Someone* (1973年) - 全米115位
- ミスター・ナチュラル - *Mr Natural* (1974年) - 全米93位
- シャレード - *Charade* (1974年) - 全米103位
- ジャイブ・トーキン - *Jive Talkin* (1975年) - 全米1位, 全英5位
- ブロード・ウェイの夜 - *Nights On Broadway* (1975年) - 全米7位
- ファニー - *Fanny(Be Tender With My Love)* (1975年) - 全米12位
- ユー・シュッド・ビー・ダンシング - *You Should Be Dancing* (1976年) - 全米1位, 米R&B4位, 全英5位
- 偽りの愛 - *Love So Right* (1976年) - 全米3位, 米R&B32位, 全英41位
- ブーギ・チャイルド - *Boogie Child* (1976年) - 全米12位, 米R&B31位
- 宇宙の片隅 - *Edge Of The Universe* (1977年) - 全米26位
- 愛はきらめきの中に - *How Deep Is Your Love* (1977年) - 全米1位, 全英3位
- ステイン・アライヴ - *Stayin' Alive* (1978年) - 全米1位, 米R&B4位, 全英4位 - 日本ではホンダ・オデッセイのCMソング(2008年〜)に使われている
- 恋のナイト・フィーバー - *Night Fever* (1978年) - 全米1位, 米R&B8位, 全英1位
- 失われた愛の世界 - *Too Much Heaven* (1979年) - 全米1位, 米R&B10位, 全英3位
- 哀愁のトラジディ - *Tragedy* (1979年) - 全米1位, 米R&B44位, 全英1位
- ラブ・ユー・インサイド・アウト - *Love You Inside Out* (1979年) - 全米1位, 米R&B57位, 全英13位
- 愛のパラダイス - *Spirits(Having Flown)* (1979年) - 全英16位
- 愛はトライアングル - *He's A Liar* (1981年) - 全米30位, 全英82位
- リヴィング・アイズ - *Living Eyes* (1981年) - 全米45位
- ウーマン・イン・ユー - *The Woman In You* (1983年) - 全米24位, 米R&B77位, 全英81位
- よりそう二人 - *Someone Belonging To Someone* (1983年) - 全米49位, 全英49位
- ユー・ウィン・アゲイン - *You Win Again* (1987年) - 全米75位, 全英1位
- E.S.P. - *E.S.P.* (1987年) - 全英51位
- クレイジー・フォー・ユア・ラヴ - *Crazy For Your Love* (1988年) - 全英79位
- オーディナリィ・ライヴス - *Ordinary Lives* (1989年) - 全英54位
- ONE - *One* (1989年) - 全米7位, 全英71位
- シークレット・ラヴ - *Secret Love* (1991年) - 全英5位
- ペイイング・ザ・プライス・オブ・ラヴ - *Paying The Price Of Love* (1993年) - 全米74位, 全英23位
- 誰がために鐘は鳴る - *For Whom The Bell Tolls* (1993年) - 全米109位, 全英4位
- 甘い経験(パート1) - *How To Fall In Love Pt.1* (1994年) - 全英30位
- アローン - *Alone* (1997年) - 全米28位, 全英5位
- もうこれ以上愛せないほど - *I Could Not Love You More* (1997年) - 全英14位

- スティル・ウォータース・ラン・ディープ - *Still Waters Run Deep* (1997年) - 全米57位, 全英18位
- ディス・イズ・ホエア・アイ・ケイム・イン - *This Is Where I Came In* (2001年) - 全英18位

私が子供だった頃、テレビ版の西部劇である、この「ローハイド」は、かなりの人気番組だった。たしか、19時か20時からスタートの、1時間番組。まだ白黒テレビの時代。でも、見慣れぬ外国の俳優たち、見知らぬ風物や慣習、未知の食べ物、ストーリーも日本のドラマとはまったく違うので、とても面白く、勉強になった。

*テーマ曲は、冒頭からラスト（あるいは、両方で）に、原語のまま流れた。勇壮なメロディと、ときにビシッと入る鞭の音、力強い唄いっぷりが、印象的。

Rollin' Rollin' Rollin' (あと3回、繰り返し) Rawhide!

Rollin' Rollin' Rollin'

Though the streams are swollen

Keep them doggies rollin',

Rawhide

Rain and wind and weather

Hell bent for leather

Wishin' my gal was by my side

All the things I'm missin'

Good vittles, love and kissin'----

*このドラマでは2番手だった、まだ若きクリント・イーストウッドは、のちに大スターとなった。

(収集プロフィール)

フランキー・レイン (Frankie Laine、1913年5月30日 - 2007年2月6日) アメリカ合衆国イリノイ州シカゴ出身の歌手・俳優。

本名はフランク・ポール・ロヴェッチオ (Francesco Paolo LoVecchio)。

イタリアのシシリー島の移民の8人兄弟の長男として生まれる。ナイトクラブなどで活動を経て、1952年の映画「真昼の決闘」のテーマ曲「ハイ・ヌーン」や1955年から1966年まで11年間続いたCBSテレビで放送された西部劇「ローハイド」のテーマ曲「Rawhide」でヒットとなった。

*「Rawhide」(作詞・ネッド・ワシントン 作曲・ディミトリ・ティオムキン)

*ローハイドは、1959年から1965年にかけて米CBSで制作・放送されたドラマ(テレビ映画、西部劇)。日本では、同時期の1959年から1965年まで、NET(現テレビ朝日)系で放送された。その後、数度再放送が行われ、最近では2006年にNHK-BS1で放送された。

英語の"rawhide"は、「ロウ(raw、生の)」+「ハイド(hide、皮)」、つまり「生皮(きかわ)」「生皮の鞭」「生皮の鞭で打つ」などを意味する言葉。ローハイドの主題歌では歌の合間に牛を追う掛け声と鞭音が鳴り響く。

あらすじ

南北戦争後の1870年代のアメリカ西部を舞台に、テキサス州のサンアントニオからミズーリ州のセタリアまで3000頭の牛を運ぶロングドライブを描く。

*「華の昭和名歌150選」\1、155が、文芸社から発売中。古書店、ネットも可。

主なキャスト

ギル・フェイバー：エリック・フレミング（声：小林修）

ロディ・イエーツ：クリント・イーストウッド（声：山田康雄）

ピート・ノーラン：シェブ・ウーリー（声：金内吉男/羽佐間道夫）

ウィッシュボーン：ポール・ブラインカー（声：永井一郎）

マッシー：ジェームズ・マートック（声：市川治）

ジョー・スカーレット：ロッキー・シャーハン（声：脇孝之/瀬下和久）

ジム・ケッツ：スティーブ・レーンズ（声：藤岡琢也）

ヘイ・スース：ロバート・カバル（声：小宮山清）

クレイ・フォレスター：チャールズ・D・グレイ（声：大塚周夫）

華の昭和名歌300 オールディーズ 第 100 : サマーワイン ナンシー・シナトラ & リー・ヘイズルウッド

この歌手は、日本では「シュガータウンは恋の町」が、一番知られているだろう。そのカップリング（1966）だったようだ。シナトラの娘ということで、実力を疑われそうだが、私の聞いた限りはかなりの実力者である。日本では、それほど人気があったわけではないが、アメリカではかなり高い人気があったようだ。

私がこの曲をはじめて聴いたのは、いまは懐かしいジュークボックス。アメリカの大衆文化が、まだ華やかに輝いて見えていた時代のこと。私がこの曲に100円を投入して予約した時点で、すでに、たくさんの予約が入っていて、多くのオールディーズを聴いて、80分が経ちしびれを切らしたころ、ようやくにこの曲が始まった。

（収集プロフィール）

ナンシー・サンドラ・シナトラ (Nancy Sandra Sinatra、1940～)

ニュージャージー州 ジャージーシティ 生まれ) は、アメリカ出身の歌手・女優。イタリア系アメリカ人。髪と瞳の色はブラウン。

エルヴィスやビートルズと並び称されたフランク・シナトラの娘で、60年代中期にアメリカで最も人気のあるアイドル歌手として活躍。代表作は、『にくい貴方 (原題: These Boots are Made For Walkin')』、『恋のひとこと (原題: Somethin' Stupid)』、『シュガー・タウンは恋の町 (原題: Sugar Town)』など。日本でも多くの歌手が彼女の曲をカバー。映画音楽では、『007は二度死ぬ』のテーマ曲『You Only Live Twice』、『キル・ビル』の挿入歌『Bang Bang』など。

家族

父 フランク・シナトラ (Frank Sinatra) 最初の妻との子。

母 ナンシー・バルバト (Nancy Barbato) イタリア人。

弟 フランク・シナトラ Jr. (Frank Sinatra Jr.) 歌手。

妹 クリステイーナ (Christina) 映画・TVプロデューサー。

夫 トミー・サンズ (Tommy Sands) 1960～1965年 (離婚)

ヒュー・ランバート (Hugh Lambert) 1970～1985年 (死別)

子供 (後夫との子) アンジェラ・ジェニファー・ランバート (Angela Jennifer Lambert)

アマンダ・ランバート

ディスコグラフィ (米国)

リプリーズ シングル — 1961～1965年

"Cuff Links and a Tie Clip"/"Not Just Your Friend" (Issued in U.S. with picture sleeve)

"To Know Him Is to Love Him"/"Like I Do"

"June, July, and August"/"Think of Me"

"You Can Have Any Boy"/"Tonight You Belong to Me"

"I See the Moon"/"Put Your Head on My Shoulder"

"The Cruel War"/"One Way" (Note: "One Way" is the only song ever committed to vinyl that Sinatra

wrote and performed)

"Thanks to You"/"Tammy"

"Where Do the Lonely Go?"/"Just Think About the Good Times"

"This Love of Mine"/"There Goes the Bride"

"True Love"/"The Answer to Everything"

リプリーズ シングル — 1965–1970年

21シングルがビルボードチャート100にランクイン

"So Long, Babe" (1965 - #86) /"If He'd Love Me"

"These Boots Are Made for Walkin'" (1966 - #1) /"The City Never Sleeps At Night"

"How Does That Grab You, Darlin'?" (1966 - #7) /"The Last of the Secret Agents"

"Friday's Child" (1966 - #36) /"Hutchinson Jail"

"In Our Time" (1966 - #46) /"Leave My Dog Alone"

"Sugar Town" (1966 - #5, pop; #1, adult contemporary) /"Summer Wine" with Lee Hazlewood (1967 - #49)

"Love Eyes" (1967 - #15, pop; #30, adult contemporary) /"Coastin'"

"Somethin' Stupid" with Frank Sinatra (1967 - #1 pop and adult contemporary) / (b-side by Frank Sinatra on U.S. single, b-side on the UK. single was "Call Me" by Nancy)

"Jackson" with Lee Hazlewood (1967 - #14, pop; #39, adult contemporary) / "You Only Live Twice" (1967 - #44, pop; #3, adult contemporary; re-recorded version of the James Bond film theme)

"Lightning's Girl" (1967 - #24) /"Until It's Time for You to Go" (Issued in U.S. with picture sleeve)

"Lady Bird" with Lee Hazlewood (1967 - #20) /"Sand" with Lee Hazlewood

"Tony Rome" (1967 - #83) /"This Town"

"Some Velvet Morning" with Lee Hazlewood (1968 - #26) /"Oh, Lonesome Me" with Lee Hazlewood

"100 Years" (1968 - #69, pop; #29, adult contemporary) /"See the Little Children"

"Happy" (1968 - #74, pop; #18, adult contemporary) /"Nice 'N' Easy"

"Good Time Girl" (1968 - #65) /"Old Devil Moon"

"Whatever Happened to Christmas?"/"I Wouldn't Trade Christmas" (both songs sung by the Sinatra family)

"God Knows I Love You" (1968 - #97, pop; #40, adult contemporary) /"Just Bein' Plain Old Me"

華の昭和名歌200 第 100 号 : 悲しき天使 メアリー・ホプキン (カバー 森山良子 他)

この曲は、日本では、なぜか急速に忘れられてしまった感じだが、もっと唄われていい名曲である。ホプキンの歌唱は素晴らしいし、森山良子の歌唱も、張り詰めた、澄んだ高音が、とても切なくて、良かった。私は、20年ぶりに、子供の頃によく行った、故郷の公園を再訪したとき、ふいにこの曲を思い出して、深い感慨に捉われたことがある。

(詞：ジーン・ラスキン、曲：ボリス・フォミン、日本語詞：漣健児)

木枯らしの街をゆく ひとりぼっちの私 思い出の広場で 思わず足を止める

(*) 思い出すは あの日のこと 暖かい恋の夢 春の風と鳥の歌と やさしいあなたが いた
ラララ

Those were the Days

1. Once upon a time there was a tavern,

Where we used to raise a glass or two.

Remember how we laughed away the hours

And dreamed of all the great things we would do.

(収集プロフィール)

原曲は1917年にロシアのボリス・フォミン (1900-1948) 作曲、コンスタンチン・パドゥレフスキー作詞で発表された「長い道を通して」。

この曲は、わが国では昭和20~30年代に『長い道』 (兵頭ニーナ訳)、または『遠い道を』 (飯塚広訳) という邦訳題名で歌われました。

この曲に英語詩をつけ、編曲して歌ったのがアメリカ人のシンガーソングライター、ジーン・ラスキンでした。

歌詞は、居酒屋で仲間と飲みかつ歌い、語らった若い日を懐かしむ内容で、彼が1960年代に通ったロンドンの白馬屋 (The White Horse Tavern) という居酒屋での思い出が発想源になっている。ラスキンがこの歌をロンドンのブルーエンジェル・クラブで歌っているとき、たまたまポール・マッカートニーが聞いて惚れ込み、さらにアレンジを加えて、新人女性歌手に歌わせました。1968年8月にリリースされると、たちまち世界中で歌われるようになり、500万枚以上という大ヒットになりました。

日本でも、同年に『悲しき天使』というタイトルで森山良子が歌い、ヒットしました。もとの歌詞とは関係のない、恋の歌に変わっていました。